

この「終わりの時」に

[聖書] マタイによる福音書 1章 1～17節

アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフシオンを、ナフシオンはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、ソロモンはレハブアムを、レハブアムはアビヤを、アビヤはアサを、アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルを、ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムはアゾルを、アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。

[1] 「コロナ元年」?

「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」とありました。そして、それがマタイによる福音書のみならず、新約聖書の始まりの言葉でもあります。私は最初、この部分に違和感を感じていました。どういうことかという、イエス・キリストは神の子ではないか。聖霊によってマリアの胎の中に宿ったお方ではないか。そうであるなら、このような人間の系図は必要ないのではないか。いや、こんな俗っぽい、連綿とした「人間」の歴史など通り越した方が神様らしいと言いか、**救い主(メシア)の誕生**に相応しいのではないか、と思ったのです。しかも、この中の名前、特に12節以下は「この人、誰?」と思える人も多いのです。

けれども、実はそここのところが聖書のポイントなのかもしれません。聖書は、救い主がどの様な中にお生まれになったのかを語る時に、人間の歴史を無視し

ないのですね。それこそ、俗っぽい、連綿とした罪人の「人間」の歴史と（それは、いわゆる無名な人々も含めて）、主イエス・キリストの誕生ということは、切っても切れないこととして描かれているのです。

…このような言い方が定着するかどうか分かりませんが、今年 2020 年は「**コロナ元年**」と言っても良い年ではないでしょうか。誰も今年の初めの頃、このような新型ウィルスで、世界が、また日本が翻弄されるなどは思ってもいないことでした。「多くの人を集めたい」と思って伝道していた教会も「集まることを今はしないようしましょう、（大きな教会などは）大勢にならないように分散しましょう、可能ならば自宅でネット配信で参加ください」などと言うことになるのは誰も思わなかったでしょう。今も尚、感染の不安を抱え、消毒や飛沫、また換気に気を付けながら礼拝を守っている訳です。こういう時の私たちは「一刻も早くこの状況から抜け出すことが出来ますように。また元通りの集会を持つことが出来ますように」と、素朴にお祈りすることがあると思います。それは間違っていないとは思いますが。…けれど、**本当に「元通り」でいいのかな？神様はもしかしたらこの事柄を通して何か私たちに気付かせたいと願っていることがあるのではないかと**いう気が私はしています。これ迄自分たちは漫然と、或る意味緊張感のない礼拝や信仰生活を続けてきてはいないだろうか、と問われている気が致します。

この系図は、**旧約聖書から新約に至る系図**とも言えます。旧約の歴史、またその歴史の中で生きてきた人々の信仰は、どんなに辛く、苦しい中であっても、神様の正しい審判と、自分たちへの救いは必ず訪れるのだという“**待望**”でありました。私たちのように「一刻も早く」などと云うのではなく、辛抱強く、何世紀、何世紀待ち続けたことでしょうか。そのような人間の営み、生きていく葛藤、或いは、信仰と不信仰…。**そういう歴史を、神様は蔑(ないがしろ)にされないのですね。**それが、このマタイ福音書冒頭の系図の意味だと言って良いのだと思います。

[2] 「終わりの時」の突入

先ほど「招きの聖句」で読んで頂いた新約聖書「**ヘブライ人の手紙**」の冒頭は、御子イエスの顕れについて、このような印象的な書き方をしています。(1~2 節)

「**神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。**」

「**かつて預言者たちによって**」というのが、**旧約聖書**です。そして、ヘブライ人への手紙の著者は、**御子イエスのおとずれ、つまり新約の到来を「この終わりの時代」**

(口語訳では「終わりの時」と言っています。「終わり」と言うのは、終末と云う意味であると共に、「歴史の完成の時」ということです。神様による救いの歴史がクライマックスを迎えたと言うのですね。これから先はもう考えなくてよい！という**決定的な時**が既に訪れている、ということです。ああ、これを信じるのが「**信仰**」なのだと思います。「神様、あなたは一体どこにおられるのですか？」という不信仰なつぶやきを私たちはしてしまうことがあるかもしれませんが、聖書は実は、はっきりと語っているのです。「**既に救いは成った**」と。

同じヘブライ人への手紙は語っていました。「**信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです**」(11:1)。これだけだと、兎に角ひたすら信じること、とまるで盲信のように捉えやすいですが、「主イエス・キリストによって」という言葉を含んだらよく分るのではないのでしょうか。**主イエスによって既に成った・実現した救いを、確信し、その事実を確認することが信仰なのだ**、と。何と幸いなことでしょうか！私たちはもう御子イエス以外の誰をも待つ必要はないのですね。あのクリスマスの夜、ベツレヘムの馬小屋に静かに来て下さった御子によって、私たちの救いは、もう約束されてしまったのです。やがて来たる「**終末**」の救いが、私たちの人生の中にもう突入している。そう捉えてよいのですね。

イスラエルの民が「**バビロン捕囚**」という憂き目に遭い、国は崩壊し、もう国も私たちが立ち直れないという暗雲が立ち込めている中で、**預言者イザヤ**はこのようなことを語りました。**59章**を見たいと思うのですが、そこには罪の告白があります。12節以下。—「御前に、わたしたちの背きの罪は重く わたしたち自身の罪が不利な証言をする。背きの罪はわたしたちと共にあり わたしたちは自分の咎を知っている。主に対して偽り背き わたしたちの神から離れ去り 虐げと裏切りを謀り 偽りの言葉を心に抱き、また、つぶやく。」

しかし、そのあとでこのような驚くべき幻も語るのです。59:16 以下ですが、「**主は人ひとりいないのを見 執り成す人がいないのを驚かれた。主の救いは主の御腕により 主を支えるのは主の恵みの御業。主は恵みの御業を鎧としてまとい 救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい 熱情を上着として身を包まれた。**」

神様は、人の背きの罪が重いということをよくご存じです。神様から見れば正当な怒りでしょう。私たち人間は申し開きが出来ないのです。しかし、神様は「執り成す人がいないのを見て驚かれた」と言うのですね。…そして、人間を救おうとされました。「**主は恵みの御業を鎧としてまとい 救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい 熱情を上着として身を包まれた。**」凄いですね。神様は、神など要らぬとうそぶく人間に対して、滅ぼすためではなく、救うために「**熱情**」

を上着としてやってくる、と言うのですね。この「熱情の神」また「執り成す方」が、御子イエスその人です。59:20 節以下ではこう語ります。「主は贖う者として、シオンに来られる。ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると主は言われる。これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると 主は言われる。」—新しい契約を結ぶと神様が宣言されています。この、御子イエスによって実現した預言の成就是、私たちの人生の成就、永遠の救いの確約です！それが、主の降誕ですよ。

[3] キリストの到来によって、世界と私たちが一変する

今日は細かい系図の人物たちについては触れませんでした。ただ、私たちはこれらの人々を遠い縁遠い人のように捉えるのではなく、この系図の中に自分の名を入れることが許されると思います。主イエス・キリストが来た—このことによって歴史の捉え方が一変するように、私たちの人生や命の捉え方も一変するということです。マタイは敢えて、“人間イエス・キリストの”系図を書きました。このお方は、私たちに繋がるために、人間となって下さったことを思い起こさせるためです。主は今日も言われます。「あなたの罪は赦された！」、「恐れるな！あなたはもう神のものだ」、そのように私たちをしっかりと捉えて離さず、共に生きていこう！と励ますために、主は人となって、私たちの罪(人生そのもの)を背負って十字架にかかり、そして甦って下さったのです。

コロナだけ考えても大変な日々です。このような生活はきっと来年もしばらく続くでしょう。しかし、神様がいないのではありませんね。「あなたがたはこの世では苦難がある。しかし勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている」(ヨハネ 16:33) と、クリスマスの主は私たちに宣言して下さっています。このアドベント、もう一度この主と出合い直したいと思います。お祈り致します。

主イエス・キリストを送って下さいました父なる神様、感謝致します。あなたの御計画は、私たちには計り知れず大きく、とても捉え切れません。そもそも、なぜ永遠なる方が有限な人間の姿になられてやってきたのか、常識では受け止めきれません。しかし、あなたは、私たちを一人でも失うことを望まないその熱情ゆえに、御子イエスを送って下さったことを、この系図は私たちに語ってくれていると思います。今、私たちは究極の救い、終わりの日の救いを頂いて生きていることを感謝します。どうぞ、暗い気持ちに支配されそうな時、あなたが御子イエスの故に私たちをあなたの子として下さっているその事実に戻らせて下さい。このクリスマス、私たちの周りの方と共に、あなたの救いの恵みに与る時として下さいますように。私たちをも、そのためにお用い下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。

